

【新規1】うすくちしょうゆの発祥地として醸造業で栄えた龍野城下の商家町。

たつの市^{したつの}龍野伝統的建造物群保存地区

所在地 兵庫県たつの市^{たつのちやう}龍野^{おおて}町大字^{もん}大手^{そと}の全域並びに大字^{かみがわら}門の外^{あさひまち}、大字^{すいじんちやう}旭^{しもがわら}町、大字^{たてまち}水神^{ほんまち}町、大字^{かみかじやう}下川原^{かわらちやう}、大字立^{かみかじやう}町、大字本^{かみかじやう}町、大字川^{かみかじやう}原^{かみかじやう}町及び大字上^{かみかじやう}霞^{かみかじやう}城の各一部

面積 約15.9ヘクタール

選定基準 (一) 伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの

たつの市は兵庫県西南部の西播磨^{はりま}地方に位置する。たつの市のほぼ中央、古代から西播磨の中心地であった龍野は、戦国時代に赤松氏が揖保川^{いぼがわ}西岸にある鷄籠山^{けいろうざん}の山頂に城を築いて居城とした。城の南の狭小な平野には16世紀末までに町並みが成立していたとみられ、江戸時代になると山裾に城が移され、城下町が形成された。龍野は、江戸時代を通じて西播磨の政治経済の中心地として栄え、17世紀後半にしょうゆ醸造が始まって以降は、醸造業を中心に発展し、近代以降もしょうゆ醸造を主産業として栄えた。

保存地区は、城下町のうち、旧町人地の主要部を含む範囲で、江戸時代から昭和戦前期にかけて建てられた伝統的建造物が良好に残る。敷地の間口いっぱいにつまき屋は、切妻^{きりつま}造^{づくり}、平入^{ひらいり}を基本とし、近世はつし2階建の本瓦^{ほんがわらぶき}葺^{ぶき}が多く見られるが、近代になると^{さんがわら}棧瓦^{さんがわら}葺^{ぶき}が主となり、明治中期以降には本2階建のものが増える。平面は、通り土間に沿って3室を1列に並べるものが主体を占め、間口の大きい家では2列となる。1階は、古くは出格子を構えるものや、全面を引戸とするものが見られ、大正以降になると、^{こしかべ}腰壁^{こしかべ}を設けて格子窓とする形式が多くなり、同形式への改修も進んだ。2階は^{おおかべ}大壁^{おおかべ}を基本とし、^{むしこまど}虫籠窓^{むしこまど}や出格子窓のほか、金属格子をはめるもの、近代になるとガラス窓なども現れる。主屋以外には、門や敷地の周囲を囲む高塀などもみられる。保存地区には、しょうゆ醸造に伴う長大な土蔵造の建物や洋風建築等の醸造関連施設もみられ、近世から近代にかけて発展した醸造町の歴史的風致を形成する。

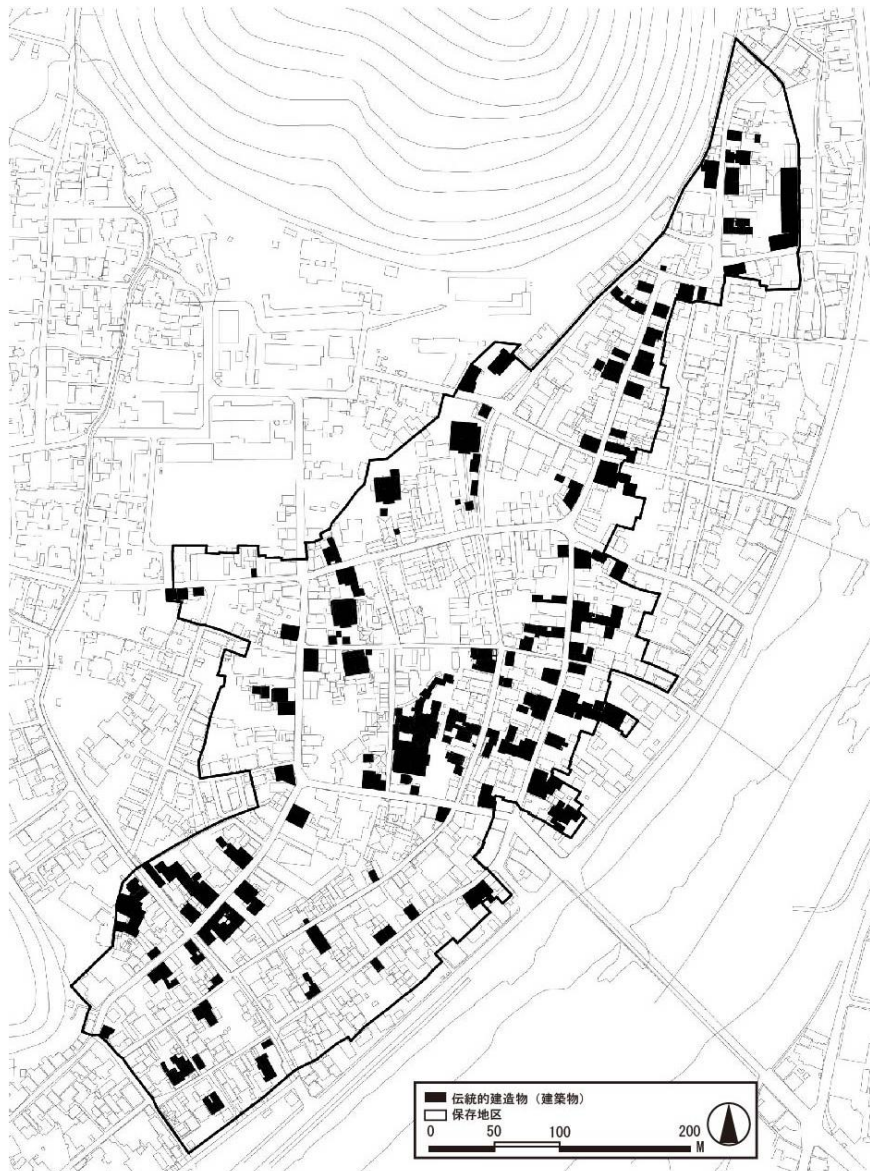
たつの市龍野伝統的建造物群保存地区は、16世紀末までに龍野城下に形成され、近世以降、しょうゆ醸造の一大産地に発展した町である。江戸時代に形成された^{まちわり}町割^{まちわり}を残すとともに、軒が低く大壁造の古式な町家や醸造等に関わる重厚な土蔵等がよく残り、中世を起源とする西播磨の城下町としての歴史的風致をよく伝え、我が国にとって価値が高い。



【写真1】現役のしょうゆ蔵（右）が建つ町並み



【写真2】通り沿いに軒の低い町家が連なる
(写真1, 写真2 共に提供はたつの市)



たつの市龍野伝統的建造物群保存地区の範囲

【新規2】地形を巧みに活かして形成された、鹿児島藩の武家地。生垣が水路に映える。

みなみ
南 し か せ だ ふもと さつま市加世田麓 伝統的建造物群保存地区

所在地 鹿児島県南さつま市大字加世田武田字下鴻巣，字尼ヶ城，字社附及び字柿本小路の全域並びに加世田本町，加世田麓町，大字加世田武田字城のやま，字上鴻巣，字竹田神社山，字梶畠ヶ，字八反堀，字下上鴻巣，字下なかぐるす，字山下小路及び字越ヶ迫の各一部

面積 約20.0ヘクタール

選定基準 (二) 伝統的建造物群及び地割ちわりがよく旧態を保持しているもの

南さつま市は、薩摩半島の南西端に位置し、加世田麓は、市域の北部、加世田川西岸の独立丘陵と台地に挟まれた南北に細長い平坦地に位置する。江戸時代、鹿児島藩は領内に外城と呼ぶ行政区画を設けて統治し、外城には家臣団の居住域である麓に、地頭仮屋と称する行政庁を置いた。12世紀後期に別府氏が加世田川西岸の独立丘陵に別府城を築いたが、15世紀中期以降は島津家が加世田を領有し、江戸時代には加世田も外城の一つとなった。別府城の周辺に広がりをもせていた武家地は、18世紀中頃に益山用水が開削されるなど、この頃、地割が整備されたと考えられる。近代以降も南薩地域の政治経済の拠点として発展するが、市街地の中心は麓の北方へと移り、旧武家地の地割は残された。

保存地区は、加世田麓のうち、加世田川西岸の区域とその南の竹田神社を含む範囲である。自然地形に沿って緩やかに曲がる大きな2本の街路と、台地裾野の湧水地から延びる水路に沿う数本の小路は、近世末期の旧態をよく留める。屋敷地の周囲には石垣と生垣を設け、敷地境から若干後退させて腕木門を開く。街路との間には庭を設けて、主屋をやや奥に配し、その周囲に附属屋を建てる。主屋は、入母屋造、平入、棧瓦葺、平屋建を基本とする。縁を介してザシキが庭に面する平面形式は、昭和初期になっても継承される。

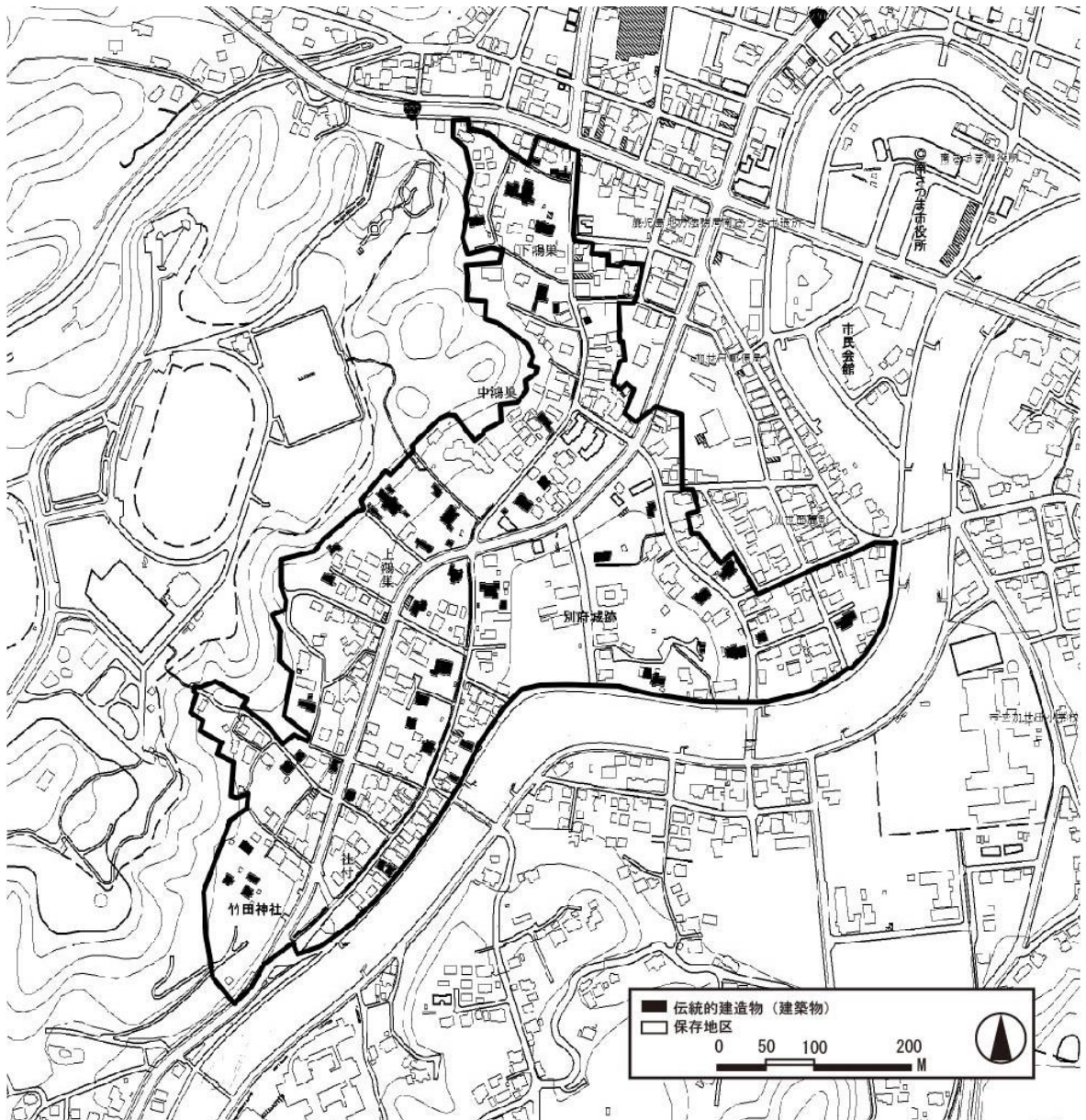
南さつま市加世田麓伝統的建造物群保存地区は、中世以来の山城周辺に形成された武家地を起源とする麓であり、自然地形に沿って曲線を描く街路や地割は近世以来の姿をよく留める。近世の武家住宅やその形式を引き継ぐ主屋をはじめ、益山用水とそこに架かる石橋、敷地を画する石垣や生垣、腕木門などとともに、地形を巧みに活かして形成された麓の独特な歴史的風致をよく伝えており、我が国にとって価値が高い。



【写真1】旧武家地を南北に貫流する益山用水



【写真2】街路沿いに石垣や生垣，腕木門が並ぶ
(写真1, 写真2 共に提供は南さつま市教育委員会)



南さつま市加世田麓伝統的建造物群保存地区の範囲